

郷土こぼれ話

地域の神様 ㊹ 大幡の神様（おわりに）

（１）大幡の神様

大幡には、たくさんの神様がありました。村の神社（村社）集落で祀られてきた神様、個人で祀ったと思われる神様。明治初めに神社はお寺の持ち物だったものが、お寺とは別のものとなり神様は村ごと（現在の字ごと）にまとめられる様になりました。この中で、大幡には人々に直接寄りそう神様がたくさんあることがわかりました。お地蔵さま（地蔵尊）二十二夜さま（二十二夜供養塔）が代表と考えます。二十二夜さまは、親しみを込めて「お地蔵さま」と呼ばれていることもあります。

※ 代の宿通りの二十二夜さまは、お地蔵さまと呼ばれています。

（２）大幡の位置

大幡は荒川の扇状地が開けた位置にあり、中山道や上野（現在の群馬県）への要所でした。米作を重んじた忍藩（江戸幕府直轄領）の境界地でもありました。農業を中心とするところは、地域の繋がりが強く、その地の習慣や行事を重んじました。このような土地大幡の人々は、特に江戸時代中期から地域の神様に縋り祀ってきたと考えられます。

※ 新島の一里塚は、貴重な歴史遺産です。県内に二ヶ所

※ 新島に、忍藩の石碑があります。

（３）まとめに代えて

大幡の神様を、これまでその地域で神様をお祀りしている人々からお話を聞きこのシリーズ「郷土こぼれ話「地域の神様」」をまとめてきました。お寺の中にも、お地蔵さまを中心にたくさん神様があります。今回、道の端にある神さま、神社に合祀されている神様を採り上げさせていただいたのは、このような意味からでした。しかし、全て拝見させていただいたわけではなく、残念ながら採り上げてない神さまもあります。

ここで、シリーズをいったん終了させていただきます。たくさんの方たちに、ご協力ご指導いただきました。改めまして、衷心より感謝申し上げたいと存じます。ありがとうございました。

文 ； 大幡公民館 広報編集委員会

大幡公民館だより別刷り 平成31年 2月（最終号）